

逞筆模試

第七回

二月六日

解答難度指数 1.80

(一) 次の傍線部分の読みをひらがなで記せ。①～⑭は音読み、⑮～⑳は訓読みである。

(30) 1×30

- ① 四顧溷溷として咫尺を弁せず。
- ② 擅臭尽れば蠅蠅去る。
- ③ 悪水沈澱して溝渠を淤塞す。
- ④ 野豊かなれば百物殷阜たり。
- ⑤ 室を喪つて鰥居す。
- ⑥ 蒨荔を被て女羅を帯とす。
- ⑦ 子夜瓊液を餐し、寅晨降霞を咀らう。
- ⑧ 漁夫欸乃の音崖下を過ぎ行く。
- ⑨ 詩体蹇澁にして流暢ならず。
- ⑩ 松籟を聆きて榭局を懐かしむ。
- ⑪ 三世の諸仏解脱幢相の靈服。
- ⑫ 大義ある放伐も篡弒に過ぎず。
- ⑬ 玉女飄揺として九垓より下る。
- ⑭ 孤臣孳子の情を知る。
- ⑮ 鷹鷂の參養を禁ず。
- ⑯ 八瀨童子が葱花輦を担ぐ。
- ⑰ 時利あらずして駟逝かず。
- ⑱ 櫻殿を閑し罷んで、磬も敲くに懶し。
- ⑳ 伝わりて岬嶼瞑目を為す。
- ㉑ 羊性淫にして猥る。
- ㉒ 始めを原ね終わりに反る。
- ㉓ 夸者は権に死し、衆庶は生を馮む。
- ㉔ 風声に驚き、鶴唳に怖る。
- ㉕ 人を尹め辟を祇むとに暇あらず。
- ㉖ 色荒を以て君を誘くまじ。
- ㉗ 更闌くるまで踊り興ずる。
- ㉘ 襦袢の袖振るや嬌かしき。
- ㉙ 熟したる橙の如き頬の色。
- ㉚ 無間の檜衾を駆ける。

(二) 次の傍線部分のカタカナを漢字で記せ。⑲、⑳は国字で答えること。

(40) 2×20

- ① この手の話は彼のドクセンジヨウだ。
- ② 久しぶりに先生のクイカイに接した。
- ③ 幟がヘンボンと閃いていた。
- ④ 全くヤオニラみの論評である。
- ⑤ 敏捷なグツシモクの小動物。
- ⑥ 都市機能がワイシヨウになる。
- ⑦ コロにも離れず起居にも忘れず。
- ⑧ 丸顔に白いビゼンを蓄えた好々爺。
- ⑨ 一族のシュウチヨウより歓待を受けた。
- ⑩ 冴え冴えとした太刀のニエ。
- ⑪ 頼みをニムもなく断った。
- ⑫ 五月人形に蓬色のモウゼンを敷く。
- ⑬ キンカク者流の擡頭する現代社会。
- ⑭ 延喜九年ツチノトミ四月四日。
- ⑮ 両論相カンカクして妥協を許さず。
- ⑯ 副葬品をカンカクの中に供える。
- ⑰ 初風を肴にシヨウジヨウ飲みをした。
- ⑱ 彼我にシヨウジヨウの差あり。
- ⑲ カスリの着物がよく似合う。
- ⑳ 河川をウグイが遡上する。

(三) 次の1～5の意味を的確に表す語を、次の□から選び、漢字で記せ。(10) 2×5

- ① 種々様々の色どり。
- ② よこしまなやりかた。
- ③ 礼を尽くして人を迎え、用いる。
- ④ 無用なものたどえ。
- ⑤ 非常に隔たりがあること。

いつこてん・けいてい・こへい
さぎちよう・さとう・ししょうら
ぜいゆう・はんじよく

(四) 次の問1と問2の四字熟語について答えよ。(30)

問1 次の四字熟語の(①～⑩)に入る適切な語を次の□から選び漢字二字で記せ。(20) 2×10

- | | | |
|--------|----|-----|
| (①) 三浴 | 桃傷 | (⑥) |
| (②) 泣練 | 勇往 | (⑦) |
| (③) 問切 | 築室 | (⑧) |
| (④) 扁鵲 | 後悔 | (⑨) |
| (⑤) 臆測 | 関関 | (⑩) |

ぎば・こくき・さんきん
しま・しよきゆう・ぜいせい
どうぼう・ぼうぶん・まいしん
りふ

問2 次の①～⑤の解説・意味にあてはまる四字熟語を後の□から選び、その傍線部分だけの読みをひらがなで記せ。(10) 2×5

- ① 非常に貧しいこと。
- ② 師の為す所より弟子は学ぶ。
- ③ 机上の空論。
- ④ 高潔な節操をいう。
- ⑤ 最高の礼物。

仲連蹈海・束帛加璧・亦步亦趨
按図索驥・狐裘蒙戎・朝齋暮塩
含英咀華・騎驢覓驢

(五) 熟字訓・当て字の読みを記せ。

- | | | |
|------|-------|------|
| ① 馬陸 | ⑥ 鹹草 | (10) |
| ② 後朝 | ⑦ 蘿蔔 | 1×10 |
| ③ 桃榔 | ⑧ 野蜀葵 | |
| ④ 縹緞 | ⑨ 水爬虫 | |
| ⑤ 小舌 | ⑩ 草石蚕 | |

(六) 次の熟語の読み(音読み)と、その語義にふさわしい訓読みを(送りがなに注意して)ひらがなで記せ。

- ア ① 輻輳…② 輻輳める
イ ③ 擘牋…④ 擘く
ウ ⑤ 舗獸…⑥ 舗う
エ ⑦ 和糴…⑧ 糴う
オ ⑨ 拊髀…⑩ 拊つ

(七) 次の①～⑤の対義語、⑥～⑩の類義語を後の□の中から選び、漢字で記せ。□の中の語は一度だけ使うこと。

- | | |
|------|------|
| ① 鮮烈 | ⑥ 春暖 |
| ② 下賤 | ⑦ 危篤 |
| ③ 天赦 | ⑧ 才媛 |
| ④ 蓄財 | ⑨ 秕糠 |
| ⑤ 暮齒 | ⑩ 慳食 |

うんしよう・けいしゆう
しようきん・すいちよう
たいぜん・ちよれき・ひりん
ぼうばく・ろうじやく・わく

(八) 次の故事・成語・諺のカタカナの部分を選択で記せ。

- ① **コウリヨウ** 雲雨を得。
② **メンバン** たる黄鳥、丘隅に止まる。
③ 凱風南よりして彼の**キョクシン**を吹く。
④ **シチヨウ** 輪卒が兵隊ならば、蝶蝶蜻蛉も鳥の内。
⑤ **コンニヤク** で石垣を築く。
⑥ 三十幅**イツコク**を共にす。
⑦ 不善の人と居るは**ホウギヨ**の肆に入るが如し。
⑧ 否極まれば**タイ**に反る。
⑨ **シユクバク**を弁せず。
⑩ **イツボウ**の争い。

(九) 文章中の傍線(1.～10.)のカタカナを漢字に直し、波線(ア～コ)の漢字の読みをひらがなで記せ。

A 惟うに、描ける美人は活ける醜女よりも可なり。伝え聞く、漢の武帝の宮人麗娟、年はじめて十四、玉の膚艶やかにして皓く、且つ**ア**涙う。燻きもしめざる**イ**ランジヤおのずから薫りて、その行くや、蛺蝶、相飛べり。
2 **ホリユウ** 繊弱、羅綺にだも勝え難し。麗娟常に身の何処にも**3** **ヨウラク**を挂くるを好まず。これ袂を払うに当たりにて、その柔らかなる膚に珠の触れて、痕を留めむことを恐れてなり。知るべし、今の世の徒に指環の多きを欲すると、**イ**聊かその抱負を異にすることを。

(泉鏡花「桜草」より)

B 断岸石瘦せて、激浪鞞鞞として打つが如く崩すが如し。荒渚蘆枯れて、風声**4** **セキレキ**咽ぶが如く悲しむが如し。夜これ幾点ぞ、已に三更を過ぎ山谷**5** **クキセキ**として樹木もまた眠る。恰もこれマルゴルトロツカトリン、湖を渉るの時なり。マルゴルトロツカトリンの侮辱に遭ひ、憤然剣を撫して之に向かい、已に雌雄を決せんと欲せしが、恩人ドグラスの為に遮られ、また情婦エレンの為に隔てられ、強いて怒焰を抑えて蹶然身を起し、飽くまでロドリツクを罵つて其の家を去り、アランベインの船を**6** **キ**して送り、去るもの省みず、俄然身を躍らして碧波激瀾たる湖水に投げ、一浮一沈、波を截り沫を冒し、**7** **ウ**方に纒かに前岸に達するを得たり。岸に上つて先ず腰間の秋水を把り、之を口に**8** **ウ**啜えて膚を拭い、衣を振るい将に行季を負い去らんとすれば、水風凄冷として皮膚を侵し来たり。毛孔**9** **オ**幾ど粟を生ぜんとす、然れども豪気の少年曾て屈せず、精神却つて爽やかにして艱苦を知らざるもの如し。時恰も一天、雲を起こして月明を**10** **カ**掩翳し、四顧黯黯として咫尺を弁せず。既にして冷雨また蕭蕭として枯れ草に注ぎ、夜色寂然ただ何れの処にか孤猿の哀しむ声と**11** **シキヨウ**の叫ぶを聞くのみ。マルゴルトの密事は、宛も志士の冤を蒙つて毒霧**12** **キ**瘴氣の密封する偏境に竄せられたるが如く、雨を凌ぐに**13** **ミノカサ**なく、険路を踏むに不借なく、单身独り行して湖岸を離れ去れば、或いは蒼鬱たる深林に入りて出ずるに迷ひ、或いは**14** **ク**嶮嶮たる險崖を下つて躓き倒れ、深山幽谷の間に彷徨して行く処を知らざるもの如し。今や豪気の少年も殆ど暗夜の路を弁せざるに苦しみ、已に踵樵を拾つて之を束ね燧を**15** **ケ**鑕つて炬を照らし去らんと欲し、また自ら思い**16** **コ**道う。アランベインの密告に拠れば、ロドリツクは既に檄を部下に伝えて兵卒を募集せりと。我今炬を照らして独行せば、恐らくは鼠輩の為に瞞見せられ飛蛾、火に入るの嘲笑を招くも知るべからず。余は洪志を懐いて国家の前途を計画するものなり。苟も大丈夫を以て自ら任ずるもの豈一時の艱苦に屈せんやと。銳意自奮して疾走山を下り、或いは荆棘を穿ち、或いは岩石を攀じ、**17** **セツキヤク**之が為に傷つて鮮血淋漓として流るるも、曾て**18** **ツウヨウ**の感なきもの如し。

(服部誠一「春窓綺話」より)